

一般演題

1. 腎機能検査における経時的腎シンチフォトの臨床的検討

土田 竜也 岡 利之

(大阪市立 城北市民病院 RI 室)

大伴 清馬 松下 義樹 長谷川弘一

(同 内科)

越智 宏暢 小田 淳郎

(大阪市大 放科)

目的：¹³¹I-ヒップランによる経時的腎シンチフォトの診断価値と意義について日常臨床検査の立場から検討した。

方法：経時的腎シンチグラフィーは次のとく行う。装置はアンガー型シンチカメラ（シンチレーター $12\phi \times 0.5$ インチ、コリメーター鉛製 1000 孔）、試薬は ¹³¹I-ヒップラン、 $5 \mu\text{Ci}/\text{kg}$ を1回急速静注、検査時体位は坐位、記録法はポラロイドカメラにて静注直後より 4 分、4～8 分、8～12 分、12～16 分と曝射時間 4 分間、4 回撮影した。必要によつてはさらに延長追跡し、撮影回数を増減する。検査順序は（1）排尿、（2）背側より後腹壁に接してコリメーター固定（3）経時にシンチフォト撮影（4）数枚のシンチフォトによる対比と読図である。

成績：腎影、尿管流出影のすみやかな出現と希薄化、膀胱貯溜影の濃厚化をみる標準型、これらが遅延停滞もしくは中断する機能障害型ないし通過障害型、さらに局所性あるいは片側性に腎影欠損する欠損型のパターンに分類できる。この読図所見からは機能と形態の両面にまたがる有力な情報が得られ、しかも各種腎、泌尿器疾患診断時に併用施行したレノグラム、²⁰³Hg、¹⁹⁷Hg-腎シンチグラム、腎血管撮影などが示す情報に比較して量的にまさるものがあつた。

結論：本法は腎の動態機能検査として泌尿器系特殊検査に先行し、検査順位からすると IP と同列に置いて日常利用してよいとおもわれる。

2. 体位変換の腎形態ならびに機能に及ぼす影響

^{(¹³¹I-Hippuran 経時的腎シンチフォトおよび}

レノグラムによる検討)

○中西 義明 吉田 祥二

(神戸大 放科)

遊走腎における体位変換の腎形態ならびに機能に及ぼす影響についてレノグラムと経時的腎シンチグラフィーにより検討を行つた。対象症例は遊走腎 56 例である。

シンチフォト上坐位において下極への偏位と球形変形を示したもののが 38 例あり、そのうち 13 例に坐位または臥位でレノグラム上異常がみられた。球形変形を示さない 18 例ではレノグラムにて異常を示したものは 1 例のみであつた。レノグラム上異常を示した症例の中 Tmax が 4 分以上の延長を示したものは、腎の球形変形を示す症例の坐位のレノグラムに多く、Te の 16 分以上の延長のみられた症例は球形変形のみられる臥位のレノグラムに多くみられた。これらの現象は経時的腎シンチフォト上の 15～30 秒の血流分布相、および 14～16 分、24～26 分の排泄相での異常としてとらえられた。坐位での Tmax 延長の理由としては主に血流の因子が大きく、下垂腎による腎動脈の牽引、機能性攣縮、筋線維性肥厚が関与しているであろう。臥位での Te の延長の理由として腎盂容量の変化、尿管の圧迫などが考えられる。

以上のごとく腎シンチフォトで坐位における腎の下極への偏位と球形変形を示すものに腎機能異常を示すものが多くみられた。